

[学術資料]

臨床での男性看護師の実態に関する
文献検討と支援のあり方の一考察

矢 島 直 樹

I. はじめに

2012年度の男性看護師は看護師就業者総数の5.9%である。1989年に男性と女性を区別していた教育内容を男女統一のカリキュラムに改正し、さらに看護婦（女性）・看護士（男性）という標記を2002年に「保健師助産師看護師法」によって看護師として名称を統一した。この間の2002年度末から2012年度までの男性看護師の就業者数は約2.4倍に大きく増加した¹⁾。

それまでの男性看護師は精神科や手術室といった限定的な臨床領域での就業が多かった。しかし就業者数の増加に伴い、一般病棟で働く男性看護師の割合も高くなっている。一方で就業者全体の男女比では約94%が女性であり、男性看護師が少数派であることは事実である。そのため看護ケアの対象となる患者にとって「看護職＝女性」というイメージの定着は否めない。このような社会的イメージと圧倒的に女性の割合が多い職場環境が、男性看護師の直面する困難や問題の理由となっている。現に男性看護師に関する研究を概観すると、男性看護師の看護ケアを受けた女性患者や、臨床教育場面で女性看護師が抱く男性看護師への思いといった男性性が患者やスタッフに及ぼす影響に関する研究²⁻⁴⁾や、男性看護師が臨床経験を通して職業としての看護師に対してどのような捉え方をしているかといった研究⁵⁻⁷⁾が見られる。つまり少数派である男性看護師は女性看護師とは異なる体験をしながら就業していると考えられる。

看護師不足が嘆かれ就業看護師数の増加が喫緊の課題であると叫ばれる中、今後も男性看護師数の増加が予測される。男性看護師が看護専門職としての能力を発揮していくために必要な職場環境や、組織の中で男性性を活かした役割を果たす上でどのような課題があるかを明らかにすることが必要である。

そこで本研究では、我が国の男性看護師に関する研究を基に、臨床における男性看護師の実態を明らかにすることを目的とした。その結果を踏まえ、男性看護師が専門性を発揮し、女性看護師と共に看護に取り組んでいくための支援のあり方について示唆を得る基礎資料としたいと考えた。

受付日 2014.11.1

受理日 2014.12.16

所 属 看護福祉学部

II. 研究方法

本研究では医学中央雑誌 Web 版 ver.5を用い、検索対象は保健師助産師看護師法が施行された2002年から2013年までの期間に発表された原著論文として「男性看護師」をキーワードとした(検索式:(男性看護師/TH or 男性看護師/AL) and (DT=2002:2013 PT=原著論文))。検索された152件から男性看護師以外(男子看護学生や保健師、看護助手など)に関する研究を除いた131件のうち、臨床で男性看護師が置かれている状況に関連する内容を含む55件を分析対象とした。

これらの文献を基に、文献数の年次推移を集計し、研究内容を研究対象となった部署に分類した。

III. 結果

1. 文献内容の分類と文献数の推移

対象とした55件の文献の中で研究対象となっている臨床部署をみたものが図1である。対象となる部署に精神科を含むか否かに注目して分類し、総合病院の場合は診療科に精神科を含むか否か、あるいは不明で分けた。複数の病院・施設を対象としている場合、その中に精神科が含まれるものを「複数病院(精神科含む)」とし、対象とした部署に精神科を含まないことが明らかなものを「一般病棟」とした。その結果、最も多いのが「一般病棟」で20件(37%)、次いで総合病院を対象とした研究で精神科を含むか否かが明記されていない「総合病院(不明)」が10件(18%)であった。対象とした部署に精神科を含む病院・病棟の中で、精神科のみを対象とした「精神科」は5件(9%)、「総合病院(精神科含む)」は4件(7%)、「複数病院(精神科含む)」は4件(7%)で、合わせると13件(23%)であった。

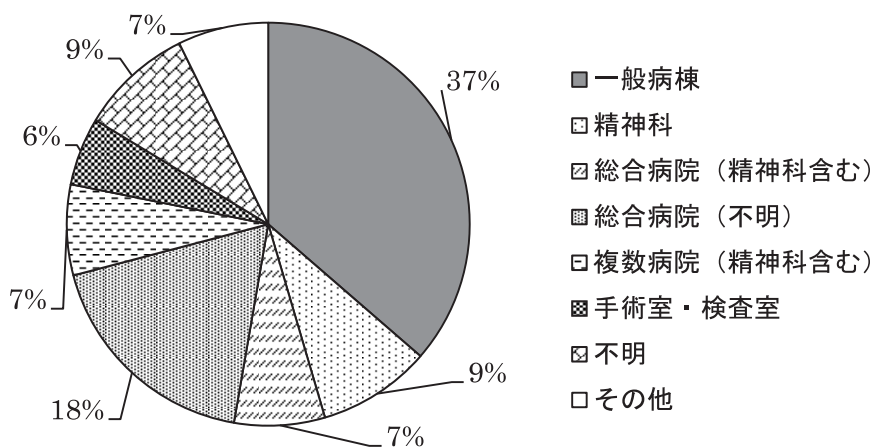


図1 部署別の分類

以上の結果より、2002年から2013年にかけて発表されている男性看護師に関する研究は、従来男性看護師の就業数の多い精神科や「手術室・検査室」といった特殊な部署より、「一般病棟」で就業している看護師を対象としたものが多く、これらの男性看護師に対する関心の高さが裏付けられた。

研究内容を分類すると6領域に分類できた。すなわち、患者を対象に男性看護師の印象や実際にケアを受けた前後で男性看護師に対する認識の変化を明らかにした「患者から見た男性看護師」、就業している部署でスタッフから期待される、または男性看護師が周囲から期待されていると認識する役割について明らかにした「男性としての役割期待」、男性看護師が働きやすい環境や女性中心の職場に男性看護師がいることの影響について調べた「男性看護師の働く職場環境」、男性看護師の職業観や看護師としてのキャリアの認識を明らかにした「男性看護師のキャリア形成・発達」、男性看護師が少数派であることから困難を感じることを明らかにした「職務上の困難感」、男性看護師が女性患者にケアを提供する時の経験や対応について明らかにした「女性患者への対応」である。

これらの分類で文献数をみたものが表1である。「患者から見た男性看護師」が19件と最も多く、次いで「男性としての役割期待」「男性看護師の働く職場環境」がともに8件、「職務上の困難感」「女性患者への対応」がともに7件、「男性看護師のキャリア形成・発達」が6件であった。

表1 男性看護師の実態に関する文献の分類

分類	文献数
男性としての役割期待	8
男性看護師の働く職場環境	8
男性看護師のキャリア形成・発達	6
職務上の困難感	7
女性患者への対応	7
患者から見た男性看護師	19

文献数の年次推移をみたものが図2である。女性の看護職を“看護婦”、男性を“看護師”と称していたそれまでの「保健婦助産婦看護婦法」から、男女に関わらず看護師に名称を統一するよう改正された2002年度以降、年を追うごとに件数は増加し、2003年の2件から2012年には10件に漸次増加していた。内容別に見ると、「患者から見た男性看護師」は2003年以降2件から3件、「男性としての役割期待」は2006年以降1件から2件、「女性患者への対応」は2006年から2012年に1件から2件と、対象期間を通じて見られた。2008年以降増加している研究内容は、「男性としての役割期待」「男性看護師のキャリア形成・発達」「職務上の困難感」である。

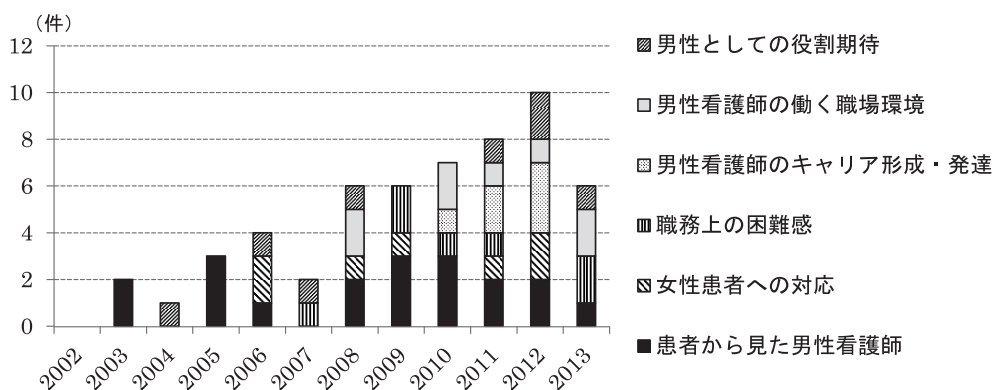


図2 文献数の年次推移と内容別

以上の結果より男性看護師に関する研究は、少数派である男性看護師が看護を実践するために生じる困難感に加えて、男性看護師が専門性をどのように高め、男性性を発揮した役割を開発していくかという視点に関心が高まっている傾向が見られた。

2. 研究内容

研究を分類毎に内容をレビューした。

1) 男性としての役割期待

男性としての役割期待に関する文献を表2に示す。

男性看護師の役割について、精神科の男性看護師が自身の役割をどのように認識しているか調査した研究⁸⁻¹⁰⁾で、男性看護師はジェンダーの観点から不穏や暴力行為のある患者への対応を役割として引き受けていることが明らかにされている。また石田¹¹⁾は児童精神科では男性看護師は女性看護師とは違う男性としての役割を認識していると述べている。

また男性看護師に期待する役割では、管理職からはリーダー的役割や専門性を高めることを期待される¹²⁻¹³⁾一方、女性看護師からは不穏時対応やスタッフ間の潤滑油的役割を期待されているとする報告があった¹²⁾。

つまり、男性看護師はジェンダーの視点から男性としての役割を期待され、自身も自覚し、期待されている役割を果たすようにふるまっていた。

2) 男性看護師の働く職場環境

男性看護師の働く職場環境に関する文献を表3に示す。

職場環境作りに関する研究では、浦中¹⁴⁾や松尾¹⁵⁾による男性看護師を複数配置することの効果を検討した研究で男性看護師の複数配置はバーンアウトスコアやストレスの知覚とは明らかな関連を見出すことができなかったと報告している。この他田¹⁶⁾による新人男性

表2 男性としての役割期待に関する文献

著者	年	目的	対象	研究内容
藤川ら ⁸⁾	2013	単科精神科病院で働く男性看護師自身が認識している役割を明らかにする	精神科に勤務する男性看護師	対象者による記述回答から内容分析し、男性看護師自身が認識している役割について【チームワーク形成の促進】【判断力の活用】【体力の活用】【看護の質向上】【男性としての患者対応】【勤務の安定性】【役割否定】の категорияが抽出された。
須田ら ²²⁾	2012	看護師の役割認識における性差と職務満足度の関係を明らかにする	看護師（男女含む）	基本属性と役割認識については、男女間で差がなかった。職務満足度については、「職業的地位」「看護師間相互の影響」で男性の得点が低かった。
堀井ら ⁹⁾	2012	精神科における男性看護師の役割意識とその関連因子を、不穏時対応を除いて明らかにする	精神科に勤務する男性看護師	半構成面接を行い、【男性看護師であることを生かした関わり】【男性看護師としての意識はしない】【女性患者への対応で意識をする】【使命感としての不穏時対応】【男性看護師のイメージをもっている】【少数派であることに関する思い】の категорияが抽出された。
越石 ²³⁾	2011	男女看護師が互いに期待する役割について調査する	病棟の男女看護師	男性看護師が病棟で働くことへのイメージなどのアンケート調査を行い、男性看護師と働くことに否定的な意見は見られなかった。
貝沼ら ¹²⁾	2008	女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割を明確にし、男性看護師の活動に於ける今後の方向性を探る	女性看護師	作成した質問紙を用いた。期待する役割は管理職からは「リーダー的役割」「専門性を高める」、スタッフからは「患者不穏時の対応」「スタッフ間の潤滑油的役割」が多く挙げられた。
石田ら ¹¹⁾	2007	児精病棟における男性看護師の役割と意義を明らかにする	児精病棟に勤務する男性看護師	質問紙を用いて行い、児精病棟に男性看護師は必要であり、女性看護師とは役割に違いがあると答えた。男児には積極的に関わり女児には女性に依頼したり、声かけや肌を露出するケア以外を行っていた。
山田ら ¹⁰⁾	2006	精神科急性期看護の専門性とジェンダーロールに関する認識を明らかにする	精神科病院看護師	作成した調査票を用いて調査し、多数の看護師が暴力をふるう患者の対応以外はジェンダーに左右されず専門性が発揮できると答えた。
袴田ら ¹³⁾	2004	一般病棟における男性看護師の配置の現状と管理者の役割に対する意識を検討する	病棟師長	「TNS『忙しさ』の尺度と看護人員配置」などを基に作成した調査票を用いて調査を行った。1病棟単位では救急、精神科で男性看護師の配置が多かった。日常業務の全項目で役割に関する得点が高く、管理者が男性看護師に期待していることがわかった。

看護師が職場において周囲の印象よくプライドを保って生き抜こうとしていたとする研究や、職場環境作りのための要望を聞き取った小嶋ら¹⁷⁾の研究が見られた。

また職場環境と職場でのやりがいや職務満足についての研究¹⁸⁻¹⁹⁾では、女性看護師と同様に看護師本来の業務をしていくためのサポートや、患者からの感謝の言葉やスタッフから認められる言葉を得られることが働きやすいと感じることに関連すると挙げられている。

この他に女性看護師を対象に職場に男性看護師がいることの影響について調査した高尾ら²⁰⁾の研究や、青野ら²¹⁾による精神科病棟で女性看護師と女性患者に行った調査では、男性看護師の配属によって病棟が良い雰囲気になったという報告がされている。

つまり、女性が多数を占める職場環境の中で男性看護師はムードメーカー的な役割を果たし、女性看護師との関係を良好に保つことで働きやすい環境を整えるようしていた。また、男性看護師の複数配置を要望しているが、複数配置の有無とバーンアウトやストレスとの関連は見られなかった。

表3 男性看護師の働く職場環境に関する文献

著者	年	目的	対象	研究内容
高尾ら ²⁰⁾	2013	男性看護師が女性中心の職場環境でどのような影響を与えているか明らかにする	女性看護師	作成した質問用紙を用いて調査し、経験年数1～2年目で「女性とは異なる視点で、職場の空気を緩衝し、人間関係を潤滑にする一方、女性患者の対応に限界がある」と感じ、職位・経験年数が上がると「良い面・悪い面があるが、ムードメーカー的な存在であってほしい」と感じていた。
青野ら ²¹⁾	2013	男性看護師配属後の変化を明らかにする	女性看護師と女性患者	質問紙を用いて調査したところ、女性看護師は「精神的に楽になった」「体力的に楽になった」「今後男性看護師を増員すべき」に多く回答した。
田淵ら ¹⁶⁾	2012	新人男性看護師が女性看護師とどのように人間関係を築こうとしているか明らかにする	新人男性看護師(1～2年目)	半構成面接を行い、【誇りを保ちつつ女性を立てる】というカテゴリが抽出された。
浦中ら ¹⁴⁾	2011	男性看護師の複数配置の効果をバーンアウトスコアを指標に評価する	国内の施設に勤務する男性看護師(分析対象は病棟勤務の看護師)	日本版バーンアウト尺度を用い、勤務経験や年齢などの背景を尋ねた。精神科の勤務、年齢、臨床経験、扶養家族の有無がバーンアウトスコアに影響していた。複数配置とバーンアウトスコアに有意な関連は見られなかった。
清藤ら ¹⁸⁾	2010	男性看護師がやりがいに感じていることを明らかにする	男性看護師	半構成面接を行い、【患者、家族から感謝や励ましの言葉を得る】【看護を行うことで喜びを感じる】【看護師としての自己の成長・成果が認められる】【相談できる同性がいることで心強い】【男性看護師としての誇りや喜びを感じる】【仕事への意欲を保つ】【看護に専念したい】というカテゴリが抽出された。
緒方 ¹⁹⁾	2010	男性看護師の職務満足度と職場環境要因にどのような関連性があるかを明らかにする	100床以上の病院に勤務する男性看護師(一般：精神=1:1)	質問紙により調査を行い、職務満足度の高さは肯定的支援・評価が行われることと所属部署への適応性が関連していた。経験年数による看護師としての自律が職務満足度に関連していることが分かった。
松尾ら ¹⁵⁾	2008	男性看護師の配置人数とストレスに対する知覚との関係について明らかにする	総合病院に勤務する男性看護師	配置率とストレスの知覚には相関関係なし。しかし配置率が低いほどストレスの知覚の合計点が高くなった。
小島ら ¹⁷⁾	2008	男性看護師が日頃感じている思いを聞き取り、男性看護師の働きやすい環境づくりに役立てる	男性看護師(精神センター除く)	半構成インタビューを行い、【施設への要望】【男性看護師増員の要望】【女性患者のケアに対する葛藤】【性差からくる戸惑い】【男性としての誇りや喜び】【女性看護師から受ける良い影響】【ストレスの緩衝】のカテゴリが抽出された。

3) 男性看護師のキャリア形成・発達

男性看護師のキャリア形成・発達に関する文献を表4に示す。

男性看護師のキャリアに関する研究は2010年以降に見られるようになり、女性に比べてライフイベントの影響が少ないことが職業的アイデンティティや職業への時間的展望に影響することが述べられている²²⁻²³⁾。しかしキャリアアップについては、結婚や子育てのため進学などに伴う経済的負担の増加に消極的になったり、職位が上がることで自身のキャリアアップと仕事の両立が困難になるなど、男性特有のものではなく女性看護師と共通することが妨げとなっていた²⁴⁻²⁶⁾。

つまり、一般的に男性看護師は女性看護師に比べてキャリア形成におけるライフイベントの影響が少ないという面があるが、男性看護師も女性看護師と同様に家庭からの影響を受けている。

表4 男性看護師のキャリア形成・発達に関する文献

著者	年	目的	対象	研究内容
翁長ら ²⁶⁾	2012	男性看護師の特性を踏まえたキャリア発達に関する意識と行動から、様相を明らかにする	男性看護師	対象に半構成面接を行い、【キャリア発達に対する消極性】【経験の蓄積と技術研鑽の意欲】【職場における役割の獲得】【専門性の追求】【看護職への価値形成】【看護の幅を広げる】【未発達な男性看護師の立場】【家族に対する責任】の категорияが抽出された。
葛原ら ²⁴⁾	2012	病院における男性看護師の職業的アイデンティティの現状と影響要因を明らかにする	九州県内の公的病院に勤務する男性看護師	PISN（看護師の職業的アイデンティティ測定尺度）は「管理職」「他職種で働いた経験がない」「男性看護師同士のネットワークがある」場合有意に得点が高い。
津野ら ²⁷⁾	2012	男性看護師が自分のキャリアアップについてどう考えているか、世代間で違いがあるかを明らかにする	総合病院、精神科病院に勤務する男性看護師	キャリアビジョンに関する質問紙調査を行い、自身のキャリアアップを考えている割合は20代・30代は40代・50代に比べて有意に高く、キャリアモデルが存在すると答えた割合は年齢が上がるるとともに高くなった。
中垣 ²⁵⁾	2011	男性看護師の生涯発達の様相を時間的展望と職務満足との関連から解明する	男性看護師	時間的展望と年齢層の関連では、有意差は認められなかった。職務満足度と年齢層の関連では、「職業的地位」「看護職間相互の影響」が高く、「専門職としての自律」「看護業務」が低かった。「医師と看護職の関係」「看護管理」は20～24歳に比べ35～39歳が有意に低かった。時間的展望と職務満足度の関連では「現在の充実感」は、「給料」「職業的地位」では強く、「専門職としての自律」「看護職間相互の影響」では弱い相関が見られた。「職業的地位」は「現在の充実感」「過去受容」「目標指向性」「希望」と正の相関が見られた。
桐明 ²⁸⁾	2011	大学病院に勤務するスペシャリストおよび看護管理者のキャリア意識を明らかにする	大学病院に勤務するスペシャリストおよび看護管理者	半構成面接を行い、「キャリアを意識し始めた時期・きっかけ」では【モデルや影響を与えた人物との出会い】【将来への不安を抱いた時】【専門資格を取得しようとした時】【昇格を機に自分の立場を認識した時】という категорияが抽出された。「キャリアにおける悩みや困難、解決方法」では【仕事の両立の難しさ】【進学のための経済的負担】【習得した技術に対する不安】【役割や立場に対する困難】【成果達成を求めていくことに対する困難】【周囲が認めてくれなかった時】【子育てとの両立】【看護スタッフと共に進める】【身近な信頼ある上司に相談する】という categoriaが抽出された。「キャリア継続のために意識していること」では【継続するための支え】【やりがいや役割の捉え方】【日々の努力】が抽出された。
内海ら ²⁹⁾	2010	1. 医療・福祉職として働く男性に共通するキャリア形成の因子構造を確認 2. キャリア形成に影響を及ぼす要因（経験年数・職場環境・労働条件満足度）これらについて職種間比較を行う	県庁所在地にある病院に勤務する医療者	質問紙の回答から因子分析を行い、5つの因子を抽出した。「職業肯定」「職場における人間関係」「自己肯定」「家族との関係」の4因子には有意な相関が見られ、「プロティアン」は相関が見られなかった。男性看護師のキャリア形成は、ほかの職種との比較で大きな差はなかった。

4) 職務上の困難感

職務上の困難感に関する文献を表5に示す。

男性看護師が感じる困難感は女性が多数を占める職場であることによるものが多く、少数派であるために目立つことや相談相手がいないこと、「男だから機械に強い」などのジェンダー・ステレオタイプへの対応や女性看護師集団にどのように溶け込むかということ、将来目標とする役割モデルを得にくいことであった³⁰⁻³⁴⁾。

また女性患者へのケアや関わり方に対する困難さを感じており^{30,33,35-36)}、その際に女性看護師にすぐに交代できるなどの体制を整えることの必要性が述べられている。

つまり、男性看護師の職業上の困難感は、多数を占める女性看護師の中で「男だから」と役割を期待されることであった。また、目標とする役割モデルを得にくいことも困難の背景の一

表5 職務上の困難感に関する文献

著者	年	目的	対象	研究内容
松浦ら ³⁰⁾	2013	男性看護師が感じる困難と対処の内容を具体的に明らかにし、そこから男性看護師が困難に対処するために必要な要素を検討する	一般病棟に勤務する男性看護師	半構成面接を行い、【医療従事者との関係で感じる戸惑い・困難と対処】【女性患者やその家族への対応時に感じる困難と対処】【少数派であるがゆえに感じる困難と対処】【ジェンダー・ステレオタイプによる対処と困難】【職場の施設・設備不足と対処】【男性看護師が感じる将来への不安と対処】の категорияが抽出された。
加古ら ³⁵⁾	2013	小児看護で患児と付添者のケアで男性看護師が認識する困難を明らかにする	小児科に勤務する男性看護師	半構成面接を行い、【思春期の女兒への羞恥心を意識したケアの実施】【思春期の女兒との良好な関係づくり】【男性が苦手な患児のケア】【授乳や母親の入浴場面に遭遇した際の対処】【母親が抱く思いへの共感】【女性看護師とケアを交代する際の調整】の категорияが抽出された。
木許ら ³⁶⁾	2011	男性看護師が抱える悩みや問題の現状と職務キャリアの関連を明らかにする	京都府内の男性看護師	作成した質問用紙を用い、男性看護師が抱える悩みや問題の現状では、羞恥心を伴うケアでは女性患者に断られる経験がある男性看護師が半数以上であった。一方で職場環境や業務に関する悩みは、患者との関わりに関する悩みと比べ、少ないようであった。男性看護師が抱える悩みや問題の現状と個人の属性との関係は、精神科に所属する場合は女性看護師に負担をかけていると感じる者の割合が少なく、一般病棟では女性看護師に負担を掛けていると感じる、女性患者に拒否された経験があると答えた男性看護師が多かった。
土居ら ³¹⁾	2010	男性看護師が集団の中に適応していくための困難と対処の特徴を明らかにする	男性看護師	半構成面接を行い、困難と対処法について KJ 法で分析した。その結果、男性看護師は学生時代から女性多数の環境に戸惑いを感じ、就職してからも女性看護師への配慮を行っていた。また学生時代に女性患者へのケアを体験する機会が少ないか未経験のため、【女性患者に対するケアへの戸惑い】があり、【とりあえず助けてもらえそうな人を選ぶ】という対処法を取っていた。
出口 ³²⁾	2009	男性看護師の職務ジェンダー意識と関連要因および職務満足度の関係を明らかにする	精神科に勤務する看護師	性別による看護拒否体験が多く、メンターのいない者に職務ジェンダー意識が有意に強い。また職務ジェンダー意識が強いほど、職務満足因子の「専門職としての自律」が低くなる。
坪之内ら ³³⁾	2009	男性看護師が感じる困難とそれらの困難を経験して成長する過程について明らかにする	男性看護師	半構成面接を行い、【女性患者の羞恥心を伴うケアを拒否される】【周りに過剰に期待される】【少数であるがゆえの不合理さ】【自己を抑制せざるをえない】【男性看護師としての将来像がもてない】【看護師としての専門性の模索】の категорияが抽出された。
田中 ³⁴⁾	2007	男性看護師が性差や少数派としてどのようなことを困難と感じ、乗り越えてきたかを明らかにする	男性看護師が少数の職場に勤務する男性看護師	半構造化面接を行い、内容を分類した。男性看護師は少数派であるために、意識的・無意識的に女性看護師集団に同化しようとしているが、女性看護師との関わりで希少性を再認識している。一方で男性としての役割を求められることに葛藤を感じ、男性看護師としての役割を模索している。少数派であることに不合理さを感じながらも、少数派であることに価値を見い出してやりがいとなっていた。

つであった。加えて女性患者に対する関わり（ケア）を拒否される経験をしている。しかしケアの交代を女性看護師に依頼することにも困難感を抱いており、速やかに交代できる体制を求めている。

5) 女性患者への対応

女性患者への対応に関する文献を表6に示す。

男性看護師は女性患者へのケア、特に羞恥心を感じるケアを行う際には患者との関係性から

ケアを行うか、または女性看護師と交代するかを判断している³⁷⁻⁴¹⁾。その中で遠藤⁴²⁾は男性看護師は患者の年齢や状態、緊急度や周りのスタッフの状況をケアの交代を依頼する基準にしていると述べており、藤野⁴³⁾は男性看護師が女性患者に行うタッチに関する場面において、患者との距離感の取り方や患者の背景を考えて行っていると述べている。

つまり、男性看護師は女性患者との関わりに困難を感じながらも、拒否される経験を重ねることで女性患者との関係の築き方や女性看護師に交代を依頼する自分なりの基準を作っていた。そして拒否されることを「女性として当たり前への反応」と捉え、交代することが患者を尊重した対応の一つであるという認識に変化していた。

表6 女性患者への対応に関する文献

著者	年	目的	対象	研究内容
小藤ら ³⁷⁾	2012	男性看護師が女性患者に看護ケアをする体験を明らかにし、卒前・卒後の男性看護師の教育について検討する	一般病棟に勤務する男性看護師	フォーカス・グループ・インタビューの後、非構造化面接を行い、体験の意味を取りだした。「看護師としての成長に、どうしようもない性差が立ちはだかる」「患者に気を使わせないように配慮することが最優先であると悟る」「仕方がないと割り切る」「困難だからこそ身についた技術に対するちょっとした誇り」「女性看護師がいると思うことでわだかまりがとける」「医療処置は看護師として介入できるため、こころが軽くなる」の6つのテーマが取り出された。
遠藤 ⁴²⁾	2012	男性看護師が女性患者へのケアを女性看護師に交代を依頼する際には、どのような基準で意思決定されているかを明らかにする	一般病棟に勤務する男性看護師	半構成面接を行い、【意思決定時の第一条件】【男性看護師の経験値】【男性看護師の技能】【男性看護師を取り巻く環境】【倫理観】の категорияが抽出された。
吉田ら ³⁸⁾	2011	病棟における看護場面で男性看護師が感じる困難とその対応の実態を明らかにする	男性看護師	半構成面接を行い、男性看護師が感じる困難として【羞恥心を伴う処置とケアの難しさ】【女性患者への声かけと許可の得方の難しさ】【男性看護師の戸惑い】【女性看護師への頼みにくさ】の4つ、対応として【困難を避けるために工夫する】【組織として取り組む】【女性看護師にアピールする】の3つの категорияが抽出された。
川勝ら ³⁹⁾	2009	女性患者へのケアにおいて男性看護師の置かれている状況と、女性看護師の理解度や配慮について明らかにする	京都市立病院で、男性看護師が所属している病棟に勤務する、師長を除く看護師	質問紙調査を行い、男性看護師は実際にケアを拒否された経験があり、女性看護師も認識していたと答えた。男性看護師は業務交代を依頼したことがあり、女性看護師も7割が経験している。実際のケアの交代は9割以上が速やかに交代できていると答えた。男性看護師が相談やアドバイスを求めたりすることはなく、女性看護師も話を聞く機会が少ないことが明らかとなった。
石井ら ⁴⁰⁾	2008	男性看護師の女性患者への羞恥心を伴うケアの実施状況を把握し、ケア実施時に女性看護師と代わったことはあるか、その理由、ケア場面で感じていることを明らかにする	男性看護師	経験年数5年未満は「清拭」「洗腸」のみ、5年以上は設定した6項目すべてを行っていた。全員が女性看護師との交代経験あり、「患者関係の中から判断してケアに臨む」「確実な技術の提供が必要」「ケアを通して信頼関係が深まる」を感じていた。
藤野 ⁴³⁾	2006	タッチにおける性差の影響の有無と具体的な影響の内容を明らかにする	男性看護師	半構成面接を行い、7つの categoriaが抽出された。その内【女性患者と男性看護師の距離感】【性役割】【若い人への対処方法】【女性患者に対する禁忌な話題】が男性看護師特有の categoriaとして抽出された。
多間ら ⁴¹⁾	2006	男性看護師が羞恥心を伴うケアにどのように関わっているかを明らかにした	男性看護師	構成的面接を行い、内容分析を行った。対象者の71.4%が断られた経験があり、必ず説明と承諾を得ており、断られた時には20代は無力感を感じ、30代は仕方がないものと捉え女性看護師に交代していた。患者の男性看護師への理解と、患者の状態の安定は、男性看護師を患者が受け入れることにつながっていると感じていた。また、勤務上のサポート体制もあった。

6) 患者から見た男性看護師

患者から見た男性看護師の文献を表7-1、7-2に示す。

患者を対象に、患者から見た男性看護師のイメージや受け入れの変化をみた研究は最も多かった。男性患者を対象とした研究では、泌尿器科に入院している男性患者に男性看護師から看護を受けることについて尋ねたところ、性別は問題としないと答えた患者が多かった⁴¹⁻⁴³⁾。女性患者を対象とした男性看護師に対する研究では、女性患者は羞恥心を伴うケアについては女性看護師に交代してもらおうという回答が多い。その一方、男性看護師によるケアを受けた女性患者は、肯定的な男性看護師像に認識が変わっていた^{2,44-48)}。

つまり、実際に男性看護師からケアを受けた患者は男女を問わず男性看護師に対して肯定的な印象を持つよう変化していた。一方で女性患者への羞恥心を伴うケア（清潔、排泄介助）では、いずれの研究でも女性看護師に交代すると答えた女性患者が多かった。

表7-1 患者から見た男性看護師に関する文献

著者	年	目的	対象	研究内容
井上ら ⁵²⁾	2013	授乳時に訪室した看護師の性別の違いに対して感じる羞恥心とその理由、および対応の違いを明らかにする	1歳未満の患児に付き添い母乳を与えている母親	対象に質問紙調査を行い、母親は、男性看護師の場合は「異性だから」という理由から女性看護師の時より羞恥心より感じていた。また男性看護師の場合は授乳を中断する傾向にあった。
織田村ら ⁴⁷⁾	2012	男性看護師が意識下手術を受けた女性患者を担当した時の患者の心理を調査した	脊髄クモ膜下麻酔手術を受け、男性看護師が担当した女性患者	半構成面接を行い、患者は看護師の性別より手術の不安や苦痛からの解放、(帝王切開で)産まれてくる子どものことの方に関心がいっていること、一方で羞恥心も感じていることが明らかになった。
山川 ⁴⁸⁾	2012	女性患者の男性看護師への思いを明らかにし、男性看護師が女性患者の思いに配慮したケアを提供するために役立てる	術後回復期にある女性患者	半構成面接を行い、【驚き】【違和感の無さ】【優しさ】【力の面で安心】【羞恥心】【男性看護師が増えてほしい】【女性が多い職場に男性がいる良さ】のカテゴリーが抽出された。
前田ら ⁵³⁾	2011	ケア提供者である看護師の「性」と入院患者の看護ケアに対する抵抗感の関連を検討した	患者	対象に聞き取り調査を行い、男性患者は看護師の性別で抵抗感に差は見られなかった。女性患者は清潔に関するケア、排泄介助、悩みの相談で男性看護師に抵抗感がある割合が有意に高かった。
原ら ⁴⁴⁾	2011	泌尿器科男性がん患者の男性看護師に対するイメージの変化を明らかにする	泌尿器科男性がん患者	半構成面接を行い、【未体験によるイメージ】【性差による違いのなさ】【任せられる存在】【男性ならではの信頼感】【男性への戸惑い】【看護師より治療が優先】【男性看護師のケアへの期待】という7つのカテゴリーが抽出された。
藤田ら ⁵⁴⁾	2010	血管造影室の男性看護師に対する患者の印象の変化や満足感、求められる看護を明らかにする	鼠径部穿刺を受けた患者	半構成面接を行い、男性患者・女性患者共通するものとして【男性看護師という存在の受け入れ】【看護に対する満足感】【性別より看護師としての資質】【病気や治療に対する思い】の4つのカテゴリーが抽出された。女性患者からは【羞恥心の受け取り方】【異性への抵抗感】の2つ、男性患者からは【先入観としての抵抗感】【親近感】の2つのカテゴリーが抽出された。
松岡ら ⁵⁵⁾	2010	患者が捉えた看護師-患者関係における共感と信頼の特徴について看護師の性別では相違があることを明らかにする	総合病院で男性看護師が2名以上勤務する一般病棟に入院している患者	共感認知尺度と患者信頼スケールによる調査を行い、患者は共感、信頼ともに女性看護師の方が男性看護師より有意に高かった。また女性看護師の方が<知識・技術への確信><安心感><見通し>で有意に高かった。
奥平ら ⁵⁶⁾	2010	患者が異性看護師から受けたくない看護ケアの内容を明らかにする	患者	質問紙調査を行い、男女とも異性看護師から「トイレの世話」「浣腸」は受けたくないと答えた。一方ほとんどの患者が同性看護師に変わらなくてよいと答えた。

表 7-2 患者から見た男性看護師に関する文献

著者	年	目的	対象	研究内容
岡田ら ⁵⁷⁾	2009	患者が日常生活援助を受ける際の看護師の性差に対する認識を明らかにする	患者	質問紙調査を行い、排泄、清潔は女性看護師に援助してほしいと答えた割合が多かった。洗面、移動は女性患者は女性看護師を希望していた。食事介助は有意差はなかった。
田境ら ⁴⁵⁾	2009	意識下で泌尿器科の手術を受ける男性患者の男性看護師の介入の有用性を調査する	意識下で泌尿器科の手術を受ける男性患者	半構面面接を行い、得られたデータを分析し、【手術室担当看護師の性別は関係なし】【男性看護師の存在の認知の有無】【男性看護師の必要性】【男性看護師へのマイナスイメージ】のカテゴリーに分類した。
前田ら ⁵⁸⁾	2009	入院中の思春期男子が男性看護師からの看護介入に抱く思いに含まれる要素を明らかにする	入院中の思春期男子	対象に半構面面接を行い、分析の結果 [発達段階に由来する思い] と [健康レベルに由来する思い] に大分類され、【性に関する看護場面での安心感】【性に関する話題での安心感と共感性】【身体活動場面での満足感】【性の話題以外の将来や自己の不安に関する相談場面での信頼感】【日常生活場面での親近感】の5つのカテゴリーが抽出された。
津田ら ⁴⁶⁾	2008	泌尿器科入院の男性患者の男性看護師の印象・イメージの捉え方やセクシュアリティに関連する看護の受け止め、認識の変化をジェンダーの視点から検証する	泌尿器科入院の男性患者	入院時と退院時にインタビューを行い認識の変化を見たところ、退院時には抵抗感やセクシュアリティに関するケアでは、女性看護師を希望する割合が減少した。
佐藤ら ⁴⁹⁾	2008	女性患者が男性看護師から援助を受けた経験の有無を比較し、男性看護師の受け入れの状況とその理由を調査する	入院中の女性患者	対象にアンケート調査を行い、男性看護師から援助を受けた経験がある患者は経験がない患者に比べて、入浴介助を除く排泄・清潔援助、相談を受け入れる割合が高い。
大山ら ⁵⁰⁾	2006	男性看護師に対する女性患者の認知度、ニーズを把握し、男性看護師のケアのあり方を明らかにする	一般病棟（精神科除く）に入院する女性患者	質問紙調査を行ったところ、男性看護師の認知度は高かったが、実際に男性看護師から看護を受けた経験がある人は2割に満たなかった。また男性看護師を必要と回答した人は過半数を超えていた。男性看護師の看護を受けた経験、勤務する病棟の患者は「男性看護師が必要」と認識していた人が有意に多かった。羞恥心を伴うケアは「女性看護師に代わる」と答えた人が多かった。
井上ら ⁵⁹⁾	2005	手術室の男性看護師の認知度やイメージ、実際の感想などを調査した	手術予定の患者	対象にアンケート調査を行ったところ、男性看護師の認知度は全体の過半数を超えていた。男性が手術の参加することへは77.5%がよいと答え、女性患者から産婦人科、泌尿器科の手術ではよくないと答えがあった。
小嶋ら ⁵¹⁾	2005	患者の男性看護師の受容状況を明らかにする	入院中の成人あるいは老年期の患者	対象にアンケート調査をしたところ、全体の8割の患者が認知しており、約半数が男性看護師の看護を経験していた。ケアを受けた経験があると、男性看護師の肯定的な印象は見られた。患者は男性看護師の羞恥心を伴うケアについては難しいが、ケアを受けた経験があると「どちらでもいい」と回答する人が多かった。男性看護師が増えることについては半数が支持的な意見であった。
新山ら ⁶⁰⁾	2005	一般病棟入院患者の男性看護師への評価を明らかにする	入院3週間以上の患者	患者信頼尺度を用い、入院時・退院時に調査を行った。入院時、退院時ともに「一貫性」と「知識・技術への確信」が高い傾向にあった。一方「見通し」は両方で低かった。術後長期にわたってケアが必要な患者に信頼得点が高い傾向にあり、70歳以上の女性は下がる傾向にあった。
橋本ら ²⁾	2003	男性看護師のケアに対する女性患者の感じ方を調査し、羞恥心を伴うケアの対応について検討した	女性患者	対象に質問紙調査を行ったところ、実際に男性看護師からケアを受けた経験がある対象の内、羞恥心を伴うケアについて清拭では女性看護師に代わることを希望する割合は年代ごとに減少したが、陰部を露出する検査は各年代で高かった。女性看護師に代わって欲しいと答えた中でも、あらかじめ説明すれば男性看護師のケアを受け入れると半数以上が答えていた。男性看護師よりケアを受けた経験があるほうが、実際にケアを受けたことがない者より、女性看護師に代わって欲しいと答えた割合は低い傾向を認めた。
井手ら ⁶¹⁾	2003	入院中の患者は男性が看護を行うことをどう捉えているかを知る	入院患者	対象にアンケート調査を行ったところ、年代と性別で、男性らしさの捉え方に差がないことがわかった。患者が触れられたくないと考えるケア項目は、清潔や排泄介助に関する項目で、男性看護師の方が強い傾向にあった。

Ⅳ. 考察

2002年の「保健師助産師看護師法」への変更以後、男性看護師の就業者数が大きく増加するとともに、一般病棟で勤務する男性看護師が多くなるなど、臨床で男性看護師の置かれている状況は大きく変化してきた。一方、社会には「看護職＝女性」というイメージが広く定着している。そのような大きな変化と社会的イメージの間で、我が国の男性看護師に関する研究から臨床での男性看護師の実態を明らかにした本研究の意義は大きい。

ここでは臨床で男性看護師が置かれている現状から、その中で男性看護師が看護師としての専門性を高め、発揮していくために必要な支援について考える。

1. 男性看護師の現状

男性看護師に関する研究の中で、「患者から見た男性看護師」「女性患者への対応」は2003年から2013年を通じて報告されている。男性看護師のほとんどが女性患者に対する羞恥心を伴うケア（清潔援助や排泄介助）を拒否され、女性看護師に交代するという経験をしていた。そのため、「男性看護師のケアをどうしたら患者に受け入れてもらえるか」という疑問を持ちながら業務を行っていると考える。特に女性患者に対して男性看護師は、ケアの交代を患者を尊重した対応の一つと捉え、患者との関係の築き方を工夫する、いつでも女性看護師と交代するなどの選択肢を持ちながら、ケアを受け入れてもらえるよう調整していた。このような男性看護師のケアに対する姿勢や行動は、ケアを受けた女性患者の男性看護師によるケアへの肯定的な認識の浸透につながっていると言える。

また「男性としての役割期待」「男性看護師の働く職場環境」に関する研究から、男性看護師にはジェンダーの視点での男性役割、あるいは少数派としての役割を期待され、男性看護師自身も自覚してその役割を果たしていた。これは期待される役割を果たすことで組織の中での足場を固め、女性看護師との関係性から生じるトラブルを回避し、少数派であっても働きやすい環境を作ろうとしていたもので、少数派である現状がすぐには変化しないことを受け入れ、自分でその環境を調整しようとしていると考えられる。

「男性看護師のキャリア形成・発達」については、男性看護師は女性看護師に比べてキャリア形成に展望を持って取り組めるという見方がある一方で、実際には女性看護師と同じように家庭からの影響を受けることが明らかにされている。加えて一般病棟で働いていく場合、いまだ少数派であるため目標となる役割モデルが得にくいことも、男性看護師特有の職務上の困難として明らかになっている。これらから看護師のキャリア形成・発達のための職場環境や組織の支援体制の整備は、男性看護師または女性看護師といったどちらか一方の問題ではなく、看護師全体に必要な支援と言える。性別を問わず職場や組織において望ましい役割を果たすことができる体制は臨床での看護の専門性の向上につながると考えられる。

2. 男性看護師が専門性を発揮していくための支援のあり方と課題

男性看護師が臨床で専門性を発揮するにはどのような支援が必要であるかについて考えると、まず少数派である男性看護師は女性患者からケアを拒否されることと、その際に女性看護師にケア交代を依頼することに強い困難を感じている。男性看護師が女性患者にケアを拒否された時、女性看護師にケアを交代できる体制の構築は重要である。しかし男性看護師がまだ配属されていない部署もあり、男性看護師を新たに受け入れる部署にこのような体制を作ることは大きな負担が生じると予測される。そのため男性看護師だけでなく、部署や管理者を支援することも必要だと考える。

また男性看護師は管理者からリーダー的役割や専門性の向上、男性的な視点が入ることによる業務の活性化を期待されており、男性看護師自身も自覚している面がある。これらは組織の中に異なる視点を入れることで業務の活性化を図ることを目的としているが、前述のように一般病棟の場合このような役割を果たしているモデルが身近にいることはまだ少ない。その中で自身がこれからの役割モデルとなることが求められ、男性看護師の負担と不安は大きいと考えられる。そのため男性看護師が新たな役割モデルとなれるようなサポートが必要である。

そして臨床で男性看護師に求められている男性的な視点とは何か、具体的には明らかにされていない。これを明らかにすることは看護の現場を多面的に捉えることにつながり、看護師の専門性を高める男性看護師・女性看護師の協働につながっていくと思われる。

以上より、男性看護師が専門性を発揮していくためには、少数派である男性看護師自身がいずれからの役割モデルになるような支援だけでなく、受け入れる部署にも体制を構築できるような支援が必要である。また組織が求める男性的な視点とは何かについて明らかにしていくことが今後の課題である。

V. 結語

我が国の男性看護師に関する研究から臨床での男性看護師の実態について検討し、以下のことが明らかとなった。

- ・男性看護師は男性としての役割を期待されていることを自覚し、その役割を果たすことで女性看護師との関係を良好に保ち、働きやすい環境を整えていた。
- ・男性看護師は「男だから」と役割を期待されること、目標とする役割モデルを得にくいこと、女性患者に関わりを拒否されること、そしてケアの交代を女性看護師に依頼することを困難と感じていた。
- ・男性看護師は女性患者に拒否される経験を重ねることで女性患者との関係の築き方や自分なりの交代を依頼する基準を作っていた。そして拒否されることを「女性として当たり前の反応」と捉え、ケアを交代することは患者を尊重した対応の一つだと考えるよう変化していた。

- ・男性看護師からケアを受けた患者は肯定的な印象を持つように変化していた。一方で女性患者への羞恥心を伴うケアでは、いずれの研究でも女性看護師に交代すると答えた女性患者が多かった。

引用文献

- 1) 厚生労働省大臣官房統計情報部：平成24年衛生行政報告例(就業医療関係者)の概況, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/12/>.
- 2) 橋本巨弘, 山中美子, 文才理：男性看護師のケアに対する女性患者の感じ方に関する調査, 日本看護学会論文集：看護総合, 34号, 233-235, 2003.
- 3) 増田貴生, 政岡祐樹, 奥野信行 他：男性看護師に新人教育で関わった女性看護師の性差を感じた経験, 日本看護学会論文集：看護教育, 42号, 188-191, 2012.
- 4) 渡邊恵美：男性看護師が女性看護師から受ける看護の臨床教育場面で抱く思い, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 37号, 179-185, 2012.
- 5) 八木原誠秀, 長亜希子, 田中敏恵 他：女性看護師との人間関係形成過程における男性看護師の姿勢 対人関係論の視点より, 埼玉県立がんセンター看護部看護研究集録, 33号, 21-24, 2009.
- 6) 林克明：男性看護師の持つ専門職としての意識 カリキュラム改正前・後よりみる, 日本看護学会論文集：看護総合, 34号, 210-212, 2003.
- 7) 松田安弘, 定廣和香子, 舟島なをみ：男性看護師の職業経験の解明, 看護教育学研究, 13巻 1号, 9-22, 2004.
- 8) 藤川君江, 渡辺俊之, 小成祐介 他：精神科看護における性別役割について 男性看護師自身の役割認識からの検討, 日本精神科看護学術集会誌, 56巻 2号, 39-41, 2013.
- 9) 堀井啓史, 横山由香, 河瀬貴志 他：精神科における男性看護師の役割意識とその関連因子 不穏時対応以外を中心に, 人間看護学研究, 10号, 117-124, 2012.
- 10) 山田光子, 清水恵子, 伊藤収 他：精神科急性期看護の専門性に関する研究 精神科急性期看護の専門性とジェンダーロールに関する意識調査, 日本精神科看護学会誌, 49巻 2号, 168-172, 2006.
- 11) 石田徹, 奥村美奈, 本吉恵子：児童・思春期精神科病棟における男性看護師の役割とその意義に関する研究 児童・思春期精神科病棟に従事している男性看護師の調査から, 日本看護学会論文集：小児看護, 37号, 233-235, 2007.
- 12) 貝沼純, 斎藤美代, 佐藤尚子 他：女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割に関する調査研究, 福島県立医科大学看護学部紀要, 10号, 23-30, 2008.
- 13) 袴田将嗣, 岩田浩子：一般病棟における男性看護師の役割に対する管理者の意識の検討, 日本看護学会論文集：看護管理, 34号, 408-410, 2004.
- 14) 浦中桂一, 水野正之, 小澤三枝子：男性看護師の複数配置の評価 パーンアウトスコアを指標として, 日本看護評価学会誌, 1巻 1号, 3-10, 2011.
- 15) 松尾新也, 小林治子, 黒柳一枝：男性看護師の配置率とストレスに対する知覚との関係 A県の総合病院に勤務する男性看護師の質問紙調査より, 日本看護学会論文集：看護管理, 38号, 366-368, 2008.
- 16) 田渕智之, 吉川三枝子：新人男性看護師の職場における人間関係の形成, 日本看護学会論文集：看護総合, 42号, 150-153, 2010.
- 17) 小島礼奈, 内山広志：男性看護師が職場で感じている思い 働きやすい環境づくりのために, 日本看

- 護学会論文集：看護管理, 38号, 36-38, 2008.
- 18) 清藤ルミ子, 藤田佳香, 山口茜理 他：男性看護師が職場で感じているやりがい, 国立高知病院医学雑誌, 19巻, 95-102, 2010.
 - 19) 緒方哲治：男性看護師の職務満足度と職場環境要因との関連に対する研究, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 35号, 144-151, 2010.
 - 20) 高尾辰徳, 阪下純一, 高橋優太 他：男性看護師が職場環境に与える影響, 日本看護学会論文集：看護管理, 43号, 483-486, 2013.
 - 21) 青野弘文, 藤田徹, 山本梨依子 他：女性病棟に男性看護師が配属されたことによる変化 女性看護師のストレス軽減をめざして, 日本精神科看護学術集会誌, 56巻 1号, 176-177, 2013.
 - 22) 須田学, 長尾あけみ, 幸野孝裕 他：看護師の役割認識における性差と職務満足度の関係—より良い職場環境を目指して—, 高松市民病院雑誌, 27巻, 43-47, 2012.
 - 23) 越石清之：男性看護師・女性看護師が互いに期待する職務・役割について, 埼玉県精神保健センター研究紀要, 20巻, 35-36, 2011.
 - 24) 葛原誠太, 生野繁子：男性看護師の職業的アイデンティティの現状と影響要因, 日本看護福祉学会誌, 17巻 2号, 65-78, 2012.
 - 25) 中垣明美：男性看護師の生涯発達の様相 時間的展望と職務満足との関連からの検討, 日本看護医療学会雑誌, 13巻 1号, 11-20, 2011.
 - 26) 翁長浩一郎, 岩本祐一, 片岡寛人 他：男性看護師のキャリア発達に関する意識と行動, 島根県立大学出雲キャンパス紀要, 7巻, 11-19, 2012.
 - 27) 津野亜優実, 関井愛紀子：男性看護師が抱くキャリアビジョンとキャリアアップに対する思い 世代間における比較検討, 日本看護学会論文集：看護管理, 42号, 553-556, 2012.
 - 28) 桐明孝光：男性看護師のキャリア意識の分析 大学病院に勤務するスペシャリストおよび看護管理者へのインタビューを通して, 日本看護学会論文集：看護管理, 41号, 29-32, 2011.
 - 29) 内海知子, 細原正子, 近藤真紀子：医療・福祉職として働く男性のキャリア形成に関する検討, 香川県立保健医療大学雑誌, 1巻, 9-19, 2010.
 - 30) 松浦圭吾, 大林けい, 児島香織 他：一般病棟における男性看護師が感じる困難とその対処に関する研究, 日本看護学会論文集：看護総合, 43号, 227-230, 2013.
 - 31) 土居大剛, 大林真帆：男性看護師の看護師集団への適応における困難と対処の特徴, 香川県看護学会誌, 1巻, 7-10, 2010.
 - 32) 出口睦雄：男性看護師の職務ジェンダー意識と職務満足度の関係, 日本看護研究学会雑誌, 32巻 4号, 59-65, 2009.
 - 33) 坪之内建治, 有田広美：男性看護師が感じる困難とそれらの困難を経験して成長する過程, 日本看護学会論文集：看護管理, 39号, 309-311, 2009.
 - 34) 田中芳雄：男性看護師が性差や少数派としての困難を乗り越えていく過程, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 32号, 9-14, 2007.
 - 35) 加古大貴, 前田貴彦：小児看護において男性看護師が認識する困難 20代の男性看護師への面接調査から, 日本小児看護学会誌, 22巻 2号, 75-81, 2013.
 - 36) 木許実花, 福田里砂, 赤澤千春：男性看護師が抱える悩みや問題の現状と職務キャリアの関係 (第1報) 女性多数の職場において男性看護師が抱える悩みや問題の現状について, 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要：健康科学, 7巻, 75-80, 2011.

- 37) 小藤祐子, 野村香, 中山周子 他: 一般病棟に勤務する男性看護師が女性患者の看護ケアをする体験, 日本看護研究学会雑誌, 35巻2号, 63-69, 2012.
- 38) 吉田裕二郎, 赤司千波: 病棟における看護において男性看護師が感じる困難とその対応整形外科病棟と外科病棟勤務者に焦点を当てて, 日本看護学会論文集: 看護総合, 41号, 24-27, 2011.
- 39) 川勝伸也, 木上陽子, 吉岡政美 他: 男性看護師・女性看護師の共働について 羞恥心を伴うケアについてのアンケート調査結果からの分析, 京都市立病院紀要, 29巻1号, 38-42, 2009.
- 40) 石井俊之, 坪井敬子: 男性看護師の羞恥心を伴うケアへの思いと実施状況, 日本看護学会論文集: 看護総合, 39号, 110-112, 2008.
- 41) 多間嗣朗, 牧田初枝, 久保京子 他: 羞恥心を伴うケアにおける男性看護師の関わり, 日本看護学会論文集: 看護総合, 37号, 33-35, 2006.
- 42) 遠藤雅代: 男性看護師が女性患者への看護ケアの交代を依頼する際意思決定の基準, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 37号, 25-30, 2012.
- 43) 藤野彰子: 男性看護師のタッチの特徴とその対処方法に関する研究 男性看護師10人への面接調査による事例研究, 日本看護学会誌, 15巻2号, 151-158, 2006.
- 44) 原茂雄, 星尚子, 桐生英子 他: 泌尿器男性がん患者の男性看護師に対するイメージ変化のプロセス, 日本看護学会論文集: 看護教育, 41号, 30-33, 2011.
- 45) 田境公治, 小林真理, 荒川泰範: 男性看護師の看護介入による男性患者の意識調査, 西尾市民病院紀要, 20巻1号, 85-88, 2009.
- 46) 津田隆行, 座安初美, 戸田幸子: 泌尿器科入院患者の男性看護師への認識の変化 男性患者のジェンダーの視点から, 日本看護学会論文集: 看護総合, 39号, 113-115, 2008.
- 47) 織田村遥, 川勝真由美, 畑中憲一 他: 男性看護師に対する女性患者の心理 脊髄クモ膜下麻酔手術を受けた患者のインタビューより, 京都市立病院紀要, 32巻1号, 76-78, 2012.
- 48) 山川聖史: 男性看護師と関わった女性患者の男性看護師への思い, 江別市立病院雑誌, 5巻1号, 38-40, 2012.
- 49) 佐藤由里子, 永井孝英, 野澤奈美 他: 各看護場面における女性患者の男性看護師の受け入れとその理由, 長野赤十字病院医誌, 21巻, 143-147, 2008.
- 50) 大山祐介, 戸北正和, 小川信子 他: 男性看護師に対する女性患者の認知度とニーズに関する研究, 保健学研究, 19巻1号, 13-19, 2006.
- 51) 小嶋亜紀子, 筑後幸恵: 男性看護師に対する入院患者の受容, 日本看護学会論文集: 看護管理, 35号, 366-368, 2005.
- 52) 井上健, 佐々野みゆき: 看護師の性別の違いに対して感じる授乳時の母親の羞恥心と対応 乳児に付き添う母親への調査から, 日本看護学会論文集: 小児看護, 43号, 122-125, 2013.
- 53) 前田えりな, 岩井美知代, 前みゆき 他: 看護師の性別と入院患者の看護ケアに対する抵抗感の関連, 日本看護学会論文集: 看護総合, 41号, 318-321, 2011.
- 54) 藤田泰嗣, 真鍋佳子: 血管造影・IVR室の男性看護師に対する患者が抱いた印象と求められる看護, 日本看護学会論文集: 成人看護 I, 41号, 205-208, 2010.
- 55) 松岡真弓, 藤田倫子: 性差による看護師—患者関係における共感と信頼の特徴 女性看護師と男性看護師の相違から, 看護・保健学研究誌, 10巻1号, 210-219, 2010.
- 56) 奥平直也, 板東良枝, 田村智子 他: 羞恥心を伴う看護ケアに関する調査, 日本看護学会論文集: 看護管理, 40号, 99-101, 2010.

- 57) 岡田チハル, 中村和子, 鹿口論理保 他: 看護師の性差に対する患者の認識, 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 5巻, 189-192, 2009.
- 58) 前田貴彦, 村本淳子, 白井徳子: 入院中の思春期男子が男性看護師からの看護介入に抱く思いに関する研究, 思春期学, 27巻3号, 283-295, 2009.
- 59) 井上直幸, 高橋雅士, 高橋理香 他: 手術室における男性看護師の特異性と役割, 日本手術医学会誌, 26巻3号, 257-259, 2005.
- 60) 新山英和, 水口清美, 橋村抄子 他: 一般病棟における男性看護師の関わりと患者の認識の変化, 日本看護学会論文集: 看護管理, 35号, 369-370, 2004.
- 61) 井手彩, 池嶋未加代, 濱田安岐子 他: 一般病棟における男性看護師のイメージに関する調査, 共済医報, 52巻3号, 246-249, 2003.

